濟生學舍と小此木信六郎

横　川　弘　蔵

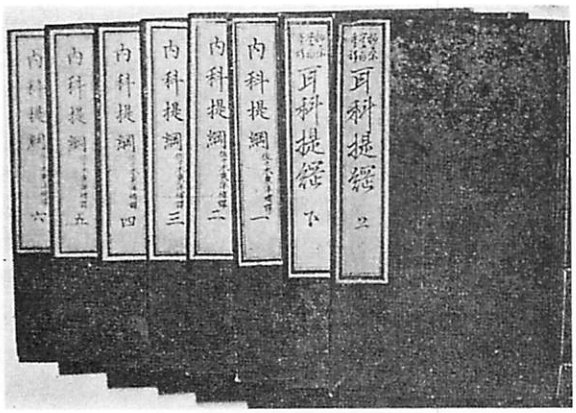
本稿は昭和51年，日本医科大学耳鼻咽喉科学教室が開講70周年を迎えた際に，「開講70周年記念論文」として横川弘蔵先生に御執筆戴き，雑誌「耳鼻咽喉科」第49巻5号および6号に掲載した「済生学舎と小此木信六郎」の再録である。再録に際し誤植訂正ならびに一部の修正を行った。

はじめに

去る昭和51年，日本医科大学耳鼻咽喉科学教室は開講70周年を迎えた。この機に70余年にわたる歴史の流れを溯り，さらに開学の先達に新たな光をあて，その源流をより正しく再認識するとともに，この原点に学ぶこころを明日への第一歩の一助としたいと考えた。私どもの日本医大と耳鼻咽喉科学教室における流れの源は，済生学舎と小此木信六郎であり，この両者なしでは今日の日本医大と耳鼻咽喉科学教室の歴史と隆盛を語ることはできないと考え，このような観点から済生学舎と小此木信六郎の足跡と，両者の交点を求めつつ筆をすすめてみたいと思う。

昭和51年（1976）は，明治9年（1876）より数えて百年目にあたった。明治9年には，2月に柏原学而の耳科提綱の刊行，4月に長谷川泰による私立医学校済生学舎の創立，6月には東京大学教授に A. Wernich の代りに E. Baelz の来日，12月に佐々木東洋の内科提綱の刊行と，いずれも医学史の上で特筆すべき出来事をみることができる。一方一般社会史の面では，7月にクラークが札幌農学校（9月に札幌学校より改称，北大の前身）に着任，11月には東京女子師範学校に幼稚園が設置——幼稚園のはじまり——などの他，ワグナーによるバイロイト音楽祭のはじまりもこの明治9年の出来事である。

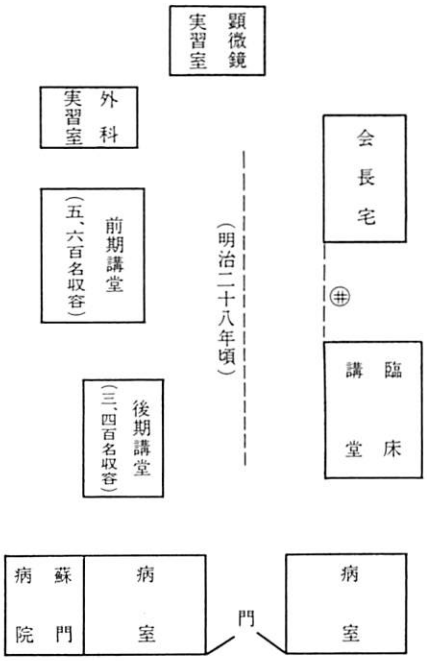
特に，耳科提綱の出版，済生学舎の創立は，医学史のそれぞれの分野におけるパイオニアとして，歴史的に意義あることで，この点からこの明治9年は医学史の上で記念すべき年である。また，済生学舎で耳鼻咽喉科講義がはじめられたのは，創立より20年後の明治29年（1896）10月に，ドクトル小此木信六郎によってであった。済生学舎創立と耳科提綱出版百年と，済生学舎での小此木信六郎耳鼻咽喉科開講（これが後の日本医科大学耳鼻咽喉科の礎となる）80年のこの記



第1図　耳科提綱と内科提綱

第2図　長谷川　泰（1842～1912）➜
（日本医事新報臨時増刊，近代名医一夕話より）

第3図　済生学舎門前（澤弌氏筆雪螢録）（日本医事新報臨時増刊，近代名医一夕話より）



第4図　済生学舎の建物配置図（明治28年）静岡斉藤氏による（日本医事新報より引用）

念すべき年に，先達の足跡を当時賀古，金杉両先輩とともに東都の三羽鳥（現代では御三家というのかも知れない）といわれ，後に日本医学専門学校理事長，日本医科大学理事長，学長となられたドクトル小此木信六郎の活躍を中心に，済生学舎の歩みとともに少しばかり触れてみたい。

既にこの分野では，入澤達吉・岡田和一郎・久保猪之吉・田中助一各氏のすぐれた記載があり，また明治百年にあたる昭和43年には記念行事が行なわれており，これらの他に時治時代の主な医事雑誌（註1），先人の回想などを文献とさせていただいた。

註1　医学雑誌：明治年間の主な医学雑誌を創刊された年代別に列挙すると下記の順となり，今回は特にゴジックのものを参考とした。

明治 6 年11月	医事雑誌（坪井信良編輯）	明治16年	大日本私立衛生会雑誌
明治 8 年	順天堂医事雑誌（佐藤尚中）	明治20年	東京医学会雑誌
明治 8 年 5 月	医学雑誌（東京医学会社）	明治22年	衛生新誌（森林太郎）
明治10年 2 月25日	**東京医事新誌（太田雄寧）**	明治23年 1 月	医事新論（森林太郎）
明治11年	**医事新聞（田代基徳）**	明治23年 1 月	日本医学会誌
明治13年 1 月	**中外医事新報（原田貞吉）**	明治26年 1 月	**済生学舎医事新報**
明治15年 1 月10日	成医会月報	明治26年10月	日本医事週報（川上元治郎）
明治15年	国家医学会雑誌（後に社会医学会雑誌）	明治26年11月	**耳鼻咽喉科雑誌（金杉英五郎）**

Ⅰ．済生学舎（私立医学専門学校済生学舎または東京医学専門学校済生学舎）と日本医学校

明治7年8月に発表された医制76条に基づき明治8月2月，東京・京都・大阪で，同9年1月には全国の府県で医術開業試験が実施された。当時医師となるには，主に(1)医学校（官立）卒業，(2)外国で資格を取得する，(3)医術開業試験に合格する，の3つの道があった。この医術開業試験受験者のための機関として，済生学舎は，33歳の長谷川泰により明治9年4月，本郷元町1丁目66番地（33頁地図参照）に開校した。詳しくは，明治8年12月24日に註2のような出願が，同年12月27日に許可され，翌明治9年4月に開校となった。

明治9年3月新聞紙上に下記の如く開校広告を出している。

『今般医学私塾を開き教員を設け解剖生理病理薬剤及び内外諸科を教授せんとす有志の諸君は来る3月25日迄に御申込可有之
月謝1円　束脩1円50銭
但し当分の処寄宿生徒は25名を限り其余は通学
2月10日
本郷元町1丁目66番地
長谷川　泰』
（郵便報知新聞明治9年3月8日第928号）

註2　私学開業願

一．私学位置　東京第四大区四小区本郷元町一丁目六十六番地　済生学舎

一．教師履歴　　新潟県士族　長谷川　泰
当亥三十三年五ケ月
安政三丙辰年ヨリ同四丁巳年マテ二年間旧長岡藩鈴木陳藏ニ付漢学修業文久二壬戌年ヨリ慶応二丙寅マテ五年間旧佐倉藩士族佐藤尚中ニ付医学修業同三丁卯年ヨリ明治元戊辰年マテ一年間旧幕府侍医松本良順ニ付医学修業明治四辛未年ヨリ同七甲戌マテ四年間独乙人繆児列児氏忽布満氏ニ付医学修業

一．学　科　医学

一．教　則

一．舎　則

一．入舎生徒ハ礼譲ヲ尊ヒ品行ヲ正フスル事

一．入舎生徒ハ総テ舎長之命ヲ可遵奉事

一．外出門限午後十時迄之事

一．入舎生徒ハ東京住居ノ慥ナル者ヲ證人ニ可相立事

一．休暇一六之日其他定例大祭日等ニハ休課之事

右之通開業仕度此段奉願候也

明治八年十二月二十四日

第四大区四小区本郷元町一丁目六十六番地寄留

新潟県士族

長谷川　泰㊞

戸　　長　山田　亮長㊞

学区取締　森　　謙三㊞

東京府権知事　楠　本　正　隆殿

私学開業聞届候事

明治八年十二月二十七日

東京府権知事　楠本　正隆㊞

開校当時学舎は舎長長谷川泰の自宅に内塾を，水道橋の近くに外塾をおいた。済生学舎規則(明治10年）は註3の如くである。なお，規則はその後明治13年，明治29年，明治34年と数回にわたり改正され，明治34年4月には54条と細目にわたり改正された（略)。明治12年には火災にあい，明治14年湯島4丁目8～9番地（現在の湯島会館のところ）に移転，明治19年に附属病院として蘇門病院(ベット数20床，初代院長山崎元修―長谷川泰の父宗済の弟子―，二代目が舎長の弟長谷川順次郎)ができる。講師はほとんど大学の助手で，報酬は1時間50銭位で，講義時間および聴講もかなり自由で，明治34年3月までは男女共学であった。明治33年秋以後の女子入学拒否が，済生学舎卒業生鷲山（吉岡）弥生による明治33年の東京女医校創立の誘因となったとの事である（吉岡弥生伝による)。

明治22年2月日新医学会設立,明治24年から学舎卒業生および開業医師を毎回50名前後募集

註3　済生学舎規則（明治10年）

第一条

1．当学舎ノ旨趣ハ学業ノ達成ヲ要スルニアルヲ以テ医学ノ要領ヲ教授シ期スルニ三年ヲ以テス其学科左ノ如シ，但シ訳書ニ従事スル者ハ訳書若クハ口訳ヲ以テシ原書ハ独乙書ヲ以テス

第一期　理学　化学　解剖学　生理学

第二期　理学　化学　解剖学　生理学

第三期　病学通論　薬物学　外科通論

第四期　病学通論　薬物学　外科通論　外科各論

第五期　外科各論　病学各論　眼科学　婦人科　小児科

第六期　病学各論　眼科学　婦人科　小児科

以上六期三年ヲ学科年限トス

第二条

1．入学ヲ請フ者ハ東京住居慥ナル者ヲ受人トナシ左ノ雛形ニ準シ入学証書ヲ差出ス可シ

寄宿生入学証書，料紙美濃紙六ツ切

証

何府県何大区何小区何町何村何番地

士族平民姓名

当何年何ケ月

右者医学為修業入塾為致候上ハ舎則堅ク為相守候ハ勿論本人儀ニ付一切引受可申候也

年号月日

東京何大区何小区何町何番地

何府県士族平民

証人　姓名　印

済生学舎幹事御中

通学生証書右（上）ニ準ス　但シ入塾ノ二字通学ト書換候事

第三条

1．休日ハ日曜ノ事

常日ハ午後十時ヲ門限トス不得止ノ痕故アル時ハ休日ノ前夜一泊スルモ可ナリ。若シ常日事故アツテ一泊スル者ハ受人ノ証書ヲ差出ス可キ事

第四条

1．塾中ニ於テ放歌飲酒喧嘩口論並賭博スルヲ禁ス

第五条

1．月謝並月俸ハ毎月廿日迄ニ可相納事

束脩　金壹円五拾銭

但シ束脩ヲ納メテ後即時退学スルモ其束脩ヲ返却セズ

月謝　金一円

但シ二十日後ニ入塾スルモノモ全月分ヲ納ム可シ

月俸　金二円

第六条

1．事故アツテ退学スル者ハ縦令教授ヲ受クルモ受ケザルモ月初三日以上ヲ経ル時ハ総テ全額ノ月謝ヲ収ム可キ事。又故アリ全月教授ヲ受ケサルモ在塾スル時ハ全額ノ月謝ヲ収メシム

第七条

1．諸事総テ舎長幹事ノ指揮ニ従フ可シ

し，3カ月を1単位とし，毎日曜日に顕微鏡実地演習・外科実地演習が行なわれた。外科実地演習は屍体を用いた。同じ頃，済生学舎同窓の旧交を温め日新医学の景況を互いに報告する事を目的とし校友会がつくられた。発起人は長谷川泰・山崎元修・加藤次郎・須藤末吉・石川清忠・山田良叔・森安信平であった。明治26年1月，山田良叔（註4）により済生学舎医事新報が創刊された。

明治34年現在済生学舎の教職員は下記の通りであった。

舎長　長谷川　泰

講師

(物理学) ドクトル　飯盛挺造

(病理，生理，電気，衛生排泄物)
山田　良叔

(病理学，解剖学) 竹崎　季薫

(解剖学，繃帯学) 石川　清忠

(化学，物理学)
薬学士　曲淵　昻章

(眼科学) 医学士　甲野　粲

(耳鼻咽喉科)
ドクトル　小此木信六郎

(内科学) 医学士　馬島　永徳

(内科学) 医学士　髙田　耕安

(外科学) 医学士　片山　芳林

(内科学) 医学士佐々倉永三郎

(外科学) 医学士　丸茂　文良

(内科，診断学)
医学士　栗本秀三郎

(排泄物) 医学士　林　蓮太郎

(細菌学) 医学士　今村　保

(医化学，生理)　須藤　憲三

(眼科学) 医学士　中島　行徳

(外科学) 医学士　桂　秀馬

(衛生学) 医学士　中川恒次郎

(産科学) 医学士　中島　襄吉

(産科婦人科学)
医学士　辻　髙俊

(外科学) 医学士　中山　森彦

(外科学) 医学士　島田　正巳

(眼科学) 医学博士　桐淵鏡次

(精神病学) 井村　忠助

(小児科学) 医学士　竹田六郎

(外科学) 医学士　塩田　広重

(眼科学) 医学士　竹内亀三郎

(内科学) 医学士　村山知二郎

(理科学) 助手　益木　金吾

(理科学) 助手　遠山盛之助

幹事　池野長太郎

事務係　中村良治

顕微鏡演習係　杉山千三

同　稲田周平

同　於曽六郎

医科実地演習係　武藤林平

同　長坂勤也

明治34年，専門学校令により従来の学生は専科となり，中学卒業生は無試験で本科，それ以外のものは試験によって予科となり，本科を卒業したものが開業試験なしに医師になり得るという制度に改正された。この専門学校令公布による制度の改正によって長谷川泰は，明治36年8月30日の新聞に「済生学舎廃校之理由に付広告」を掲載し，28年間の学舎の歩みを独断で止めてしまった（註5）。

明治30年代までの医学校〔医術開業試験のための機関を含む（東京に限る）〕としては，明治5年11月神田南甲賀町17番地に緒方惟準による適々斉塾をはじめ，明治6年より同13年まで三田慶応義塾内に医学所（校長松山棟庵）が併置され，明治12年佐藤泰然による佐倉順天堂が，同14年5月には銀座に髙木兼寛による成医会講習所（現慈恵医大の前身），同15年樫村清忠・田口和美らの興医会による神田小川町の東亜医学校（講師に森林太郎・賀古鶴所・片山芳林ら），同18年頃に岡田和一郎による本郷追分町の刀圭学舎，同21年に神田同朋町に東京医学院などが挙げら

註4　山田良叔：
秋田藩医の子として安政5年（1858）に生る。明治10年済生学舎卒業，明治11年医術開業試験に合格，警視庁勤務，済生学舎専任講師（生理学，薬理学，病理学担当），明治26年1月，済生学舎医事新報を刊行する。明治37年日本医学校創立とともに理事兼講師となる（磯部検三はこれを済生学舎の復活といっている）明治40年（1907）歿。

註5　済生学舎廃校之理由に付広告

当済生学舎は本月卅一日限り廃校す其理由左の如し

一．私立大学と改称すること行はれず故に将来之を維持すること能はず抑当校は明治廿二年本郷真砂町十五番地に敷地を購入し移転新築の上は私立大学の組織となすべき計画をなしたるは世人の知る処なり。今般金十八万円余を投じ校舎及附属医院新築の図面設計及経費積等悉皆完結し来る十月より新築に着手し現在教員の外更に外国教師及専務医学士若干名を招聘し私立大学組織に改むる申請をなすことに決定したり。既に私立法律学校は私立大学改称の認可を受けたるのみならず明治大学の如きは本科卒業生に明治大学法学士，専門科卒業生に明法学士の称号を与ふることを認可せられたり。然るに文部省当局者は私立医学校には私立大学の名称を許可せずと明言せり，然る時は当校が明治廿二年以来計画したる私立大学改称の企望は水泡に帰し之が為め将来当校の信用を博して維持す可きこと覚束なし，之れ今般断然廃校したる第一の理由なり。

二．普通の医学専門学校として今後維持す可き必要なし。抑当校は明治九年四月の創立に罹り本年七月迄入学者総計二万千四百九十四名の多きに達せり。当時官立として東京帝国大学医学部之れあるのみ他に官立の医学校之れなく府県に医学校の設け之れありと雖も其多数は微々たる者に付当校は三十余名の専門職員を招聘し一千余名の生徒を収容し奮て医学教育の任に当り爾来廿八年間継続し其間東京に於て医術開業前期及後期試験を受け及第したる者合計九千六百二十八人其他当校に於て修学し大阪等に於て医術開業前期及後期試験を受け及第したる者二千余人之れあり而して当校出身者にして地方に医術開業をなす者道庁府県を通じ七千人以上に上り即ち全国開業医の数は従来開業医及び限地開業医を除き日新医学者は官立大学卒業者官立府県立医学校卒業者外国医学校卒業者医術開業試験及第者合計一万四千八百三十三人なり故に此日新医学者全数中我が済生学舎出身者は実に其半数に位せり且つ当校出身者にして医学博士の称号を授与せられ現に高等官の職を奉ずる者之れあり海陸軍医の職を奉ずる者夥しく之れあり，警視庁府県の奏任技師の職を奉ずる者之れあり，又廿七・八年日清戦役に際し当校出身者にして陸軍三等軍医に任ぜられたる者二百五十余名之れあり其他陸軍予備病院医員に採用せられたる者亦夥し。

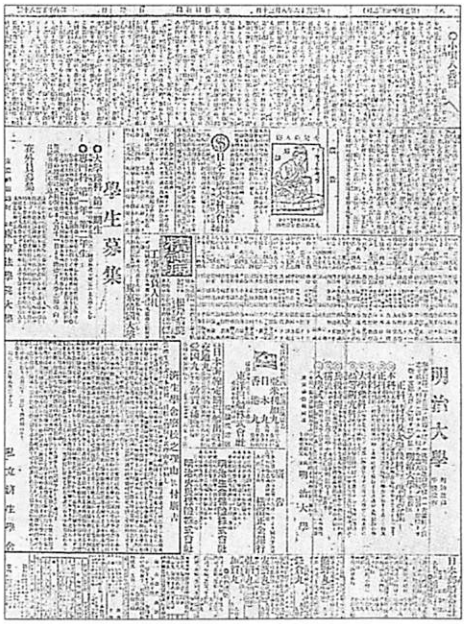
右の次第に付当済生学舎が創立以来国家に貢献したる医学上の効績少からずと確信す。然るに今年三月勅令第六十一号を以て専門学校令を発布せられ明治二十年勅令第四十八号府県医学校の費用は明治二十一年度以降地方税を以て支弁することを得ずと云ふ禁止を解かれたり之れが為め今後現在官立府県立医学校八箇所の外に陸續地方に新設の運に可相成ものと信ず就ては当済生学舎は多年計画したる如く法律学校と同様私立大学組織に改むれば格別なれども普通の医学専門学校として之を継続し国家の需用供給に応じ医学者を養成す可き必要之れなしと信ず之れ今般廃校したる第二の理由なり。

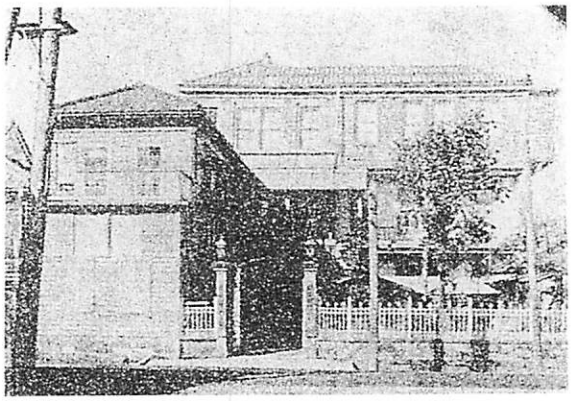
右の理由に由り本月三十一日限り断然廃校せり右広告す。

明治三十六年八月二十九日

私立済生学舎

東京日日新聞，明治36年8月30日掲載の済生学舎廃校之理由に付広告





第5図　日本医学校（神田淡路町）

れるが，成医会講習所を除きいずれもわずかの年月で閉校した。明治9年より明治36年の28年間――その間一部に賀古鶴所，森鷗外？の“日本医育論”などに代表される開業医養成に対する批判があったが――，入学者21,494名，医術開業試験合格者9.628名で，当時の開業医数14,833名の大半を済生学舎卒業生がしめていたことからも済生学舎の存在の大きさを知ることができ，私立医学校の祖というにふさわしい。卒業生の中で耳鼻咽喉科関係の人々は，佐藤敏夫(明治30)，鍋谷伝次郎（明治33），津田終吉（明治34）らの先輩の名が挙げられる。

しかしこの突然の廃校は，理由がいろいろ取りざたされ入澤達吉氏が述べられた様に予定の行動であったのかも知れないが，それはさておき，在野の長谷川泰によって築かれて来た医師養成という偉大な功績に一大汚点を残したこととなり，誠に惜しい出来事であった。

廃校により勉学の場を失った七百余名の生徒達は，明治36年9月4日本郷中央会堂で緊急相談会を開き，まず三崎町1丁目大成学館跡に済生学舎同窓医学講習会（註6）を設け済生学舎在学証書所持者に限り入学が許され，その応急手段によつて一応勉学を続けることができた。その後，済生学舎講師石川清忠による同窓医学講習会と日本医事週報主幹川上元治郎による医学研究会をへて，さらに明治37年の日露戦争による軍医の急需で明治34年の専門学校令（前述）によらずとも医術開業試験合格による医師への道が再開されることになり，石川清忠は本郷千駄木町に東京医学校を，川上元治郎は磯部検三をして私立日本医学校を企画させ，磯部は山根正次にはかり，前期学科を前記三崎町1丁目大成学館跡（4月24日）で，後期学科を神田美土代町2丁目東京医師倶楽部（4月15日）で各々授業を開始した〔この日（認可日）が明治37年4月15日（現日本医科大学創立記念日）である〕。日本医学校開校式も神田美土代町で行なわれた。なお東京医師倶楽部では明治35年1月17日から金杉英五郎・岡田和一郎らにより医師講習会が開かれたが，明治42年12月30日で廃止され，明治43年1月からの基礎医学講習会として残った。同37年7月に神田淡路町2丁目（元シネマパレス跡，現損保会館）に移り私立日本医学校（第5図）として授業が続けられた。創立当時の日本医学校は，前期2年，後期2年の計4年の正科課程の他，臨床講習会を併置した。同43年3月に東京医学校を買収合併し，校舎は千駄木，附属病院が淡路町校舎となり，明治45年7月10日に日本医学専門学校となった。

註6　済生学舎同窓医学講習会規定

第一章

第一条　本会は学生に医学を教授するを以て目的とす

第二条　修業年限を四年とす前二ケ年に前期諸学科を教授し後二ケ年に後期諸学科を教授す

第三条　教授科目左の如し

前期学科

物理学，化学，解剖学，組織学，生理学，右諸学科の実地検査

後期学科

内科通論，外科通論，内科各論，外科各論，薬物学，診断学，眼科学，産科学，臨床講義

第二章　学年，授業時間，休業

第四条　学年は四月十一日に起り三月卅一日に終る

第五条　授業時間は毎日午後一時より同七時迄に前期諸学科を教授し午後一時より同八時迄に後期諸学科を教授す

第六条　休業日は左の如し

日曜日　大祭日　八月一日より同卅一日迄

十二月廿六日より翌年一月七日迄

第三章　入会及退会

第七条　入会資格を定むる左の如し

一．旧済生学舎生徒にして明治卅六年七月以降同学舎に在学せし者

二．年齢十八以上の男子にして品行方正なる者

三．高等小学校卒業又は之と同等以上の学歴ある者

第八条　入会志願者は左の書式に依り願出へし（書式略）

第九条　保証人東京市内外へ移転し又は死亡したるときは更に保証人を設け保証書を差出すべし保証人変更のとき亦同じ

第十条　退会せんと欲する者は会員証を添へ保証人連署を以て願出で承認を受くべし

第十一条　何等の名義を以てするも休学二ケ月以上に及ぶか又は一ケ月以上会費を怠納する者幷に本会役員の指揮に従はざる者は会員籍より除名すべし

第十二条　除名者再び入会を出願るときは其怠納会費を完納するに非ざれば入会を許さず

第四章　試　験

第十三条　試験を別て学年試験及卒業試験となす

第十四条　学年試験は毎年三月之を施行す試験科目は其学年中教授したるものとす

第十五条　卒業試験は全科卒業の後之を施行す試験科目は全学科に亙るものとす

第十六条　試験に及第したるものには及第証書及卒業証書を授与す

第五章　学　費

第十七条　第七条第一項の資格なき者にして入会の許可を得たるときは入会金三円を納め会員証を受取るべし

第十八条　会員は出席すると否とに拘はらず毎月会費金二円五十銭を其月の三日迄に納むべし

但八月は会費を徴収せず

第十九条　四学年生は臨床講義用患者費として毎月金五十銭を納むべし

第二十条　既に収めたる入会金，会員及患者費は一切返戻せず

東京市神田区三崎町一丁目十一番

同窓医学講習会

前期学科目

▲解剖学	一週六時間	竹崎講師
▲生理学	同	石川講師
▲物理学	同	飯盛講師
▲化　学	同	曲淵講師
▲組織学	参時間	石川講師

後期学科

▲病理学通論	一週六時間	東　講師
▲内科学	同五時間	馬島講師
		楠本講師
▲外科通論	同六時間	桂　講師
▲外科各論	同五時間	塩田講師
▲診断学	同参時間	樫田講師
▲薬物学	同参時間	未　定
▲眼科学	同参時間	中泉講師
▲産科学	同参時間	中島講師
▲臨床講義	同貳時間	高田講師
		馬島講師

II．小此木信六郎（1860～1928）とその周辺

小此木信六郎は，万延元年（1860）3月6日福島県二本松町（現在の二本松市竹田二丁目）で城主丹羽氏の藩医をつとめた小此木閑雅（玄智）（註7）（1816～1872）の3男（6男？）として出生。幼名信利（実姉こうは久保猪之吉の母），福島第1小学校〔福島第1小学校別科――福島洋学校――に3歳年長の後藤新平（1857～1929）が在学し――後藤の他原郁次郎（後の隈川宗雄）と共に通学した〕から須賀川公立岩瀬病院医学所（須賀川医学校）福島医学校をへて（註8），明治9年（1876）上京，東京医科大学（現東大医学部）予科に入学，同期に坪井次郎・三輪徳寛らがいた。明治18年大桶みつと結婚，明治21年7月8日東京医科大学を中途退学し，村田謙太郎（註9）・柴田耕一氏らとともにドイツに留学，ドイツ Tübingen 大学（Württemberg 大学）に入学した（註10）。明治24年同大学卒業。明治27年まで Wagenhäuser 教授のもとで卒業論文「晩発性梅毒ニ起因スル内耳炎 Über Labyrintherkrankung und deren Symptomenkomplex bei

---

註7　小此木閑雅（1817～1872）：小此木天然（1784～1840）の長男，父小此木天然と同様通称玄智という。えみなは利弦。父天然はえみなを利沢といい，文政6年（1828）長崎に遊学，蘭学，医学をシーボルトに学び郷里で刑屍解剖を行ない子弟を教え東北に於ける西洋医学の嚆矢といわれ，天保11年（1840）11月11日に56歳で歿，二本松宗徳山心安寺に葬られる。閑雅は天保年間に江戸に出て坪井信道に医学を学び*，郷里において主に外科で名声を得，嘉永6年（1853）に始めて種痘を二本松藩で施行した〔我が国での種痘成功は嘉永2年（1849）楢林宗建によるものが始めとされている〕。明治5年（1872）3月12日，56歳で他界，父天然と同様心安寺に葬られる。なお明治17年（1884）に記念碑が，二本松藩主丹羽家の菩提寺，大隣寺に建てられる。堀江半峰撰文，松本順書による。

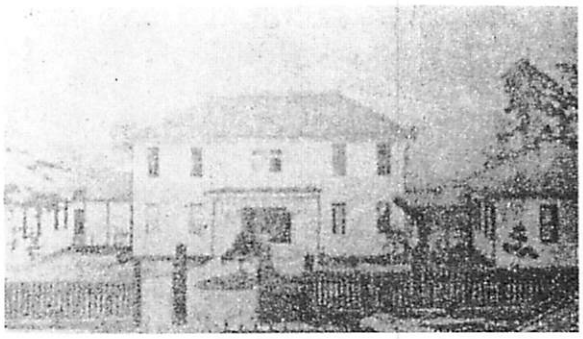
＊坪井信道塾姓名録の中には緒方洪庵，黒川良安らと同様名前を見出すことはできない。二本松藩からは，長沢太中・山本周伯・近藤忠純・小泉泰順・鶴田元周が名を連ねている。

註8　後藤新平（1857～1929）との交友：高野長英の甥にあたる後藤新平が，明治6年福島洋学校（福島第一小学校別科）に入学，その時，小学校に3歳年少の小此木信六郎が在学（後年新平の妻となった安場和子は9歳年下で同校に通学）ともに通学した。その後，引続き須賀川病院医学所（現在の公立岩瀬病院）に学んだ。小此木は明治9年に東京へ，後藤は医師として明治9年名古屋へと須賀川を離れた。大正5年11月3日，福島県須賀川市，公立岩瀬病院に岩瀬郡立病院沿革記の石碑が建てられた。篆（てん）額は後藤新平，撰文は小此木信六郎である。（撰文27頁参照）

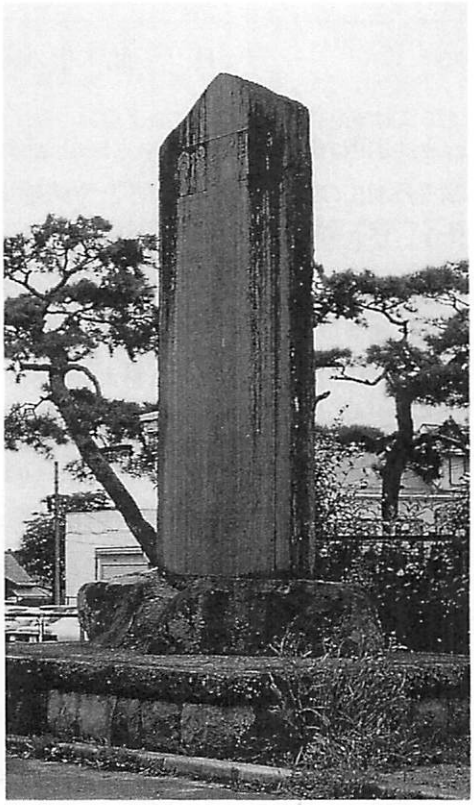
註9　村田謙太郎：福島県出身，文久2年（1862）生。明治17年10月東京大学医学部卒，明治20年助教授，明治21年皮膚病黴毒学修学のためドイツに留学，明治23年3月帰国，明治23年東京大学新設の皮膚病黴毒科を担当，明治25年6月27日31歳で病没（医学博士の最初の死亡者）。

註10　小此木信六郎よりの来信（明治22年2月）

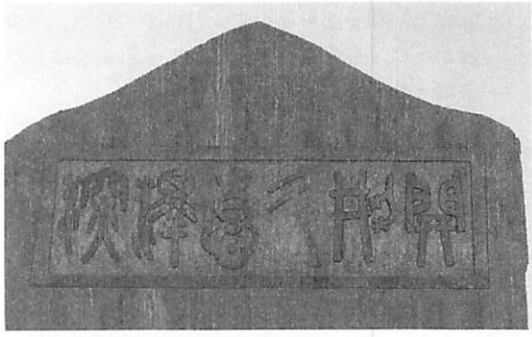
「当地留学生何レモ恙無シ村田氏ハ次学期ヨリブレスラウニ転スル由柴田氏ハミュンヘン，Frauenklinik ニ勉励致居候，小生ハ着独後直チニ König-Württemberg 大学ニ入門仕候，当地ハ御承知ノ通南独ノ僻陬ユヘ山水モ明媚ニ人民モ自然純撲ニテ教師ハシツコキ程丁寧ニ教授致呉満足ニ罷在候何レ次便ニ詳報可仕候」



第6図　須賀川医学校
福島医学校の前身，須賀川にあった。



第7図　現在の公立岩瀬病院と碑



編者註記　次頁の「公立岩瀬病院沿革記」石碑文は，今回の再録に際し改めて碑面と照合し，「耳鼻咽喉科」誌に掲載されたものの誤字を訂正した上で，字詰め字配りを碑面と全く同一に合わせた．但し，碑面にない返り点ならびに句読点は前回掲載の表示に従った．なお，下記の上段の文字は碑面上ではそれぞれ下段の字体が用いられている．

上掲の写真は碑面上部の題字篆額の部分である．

勲　従　焉　島　貨　職　所　經　歳　能　概

勲従焉島貨職所經歳能槩

第8図　石碑全景（上）と石碑文の一部（下）

開創久惠澤深

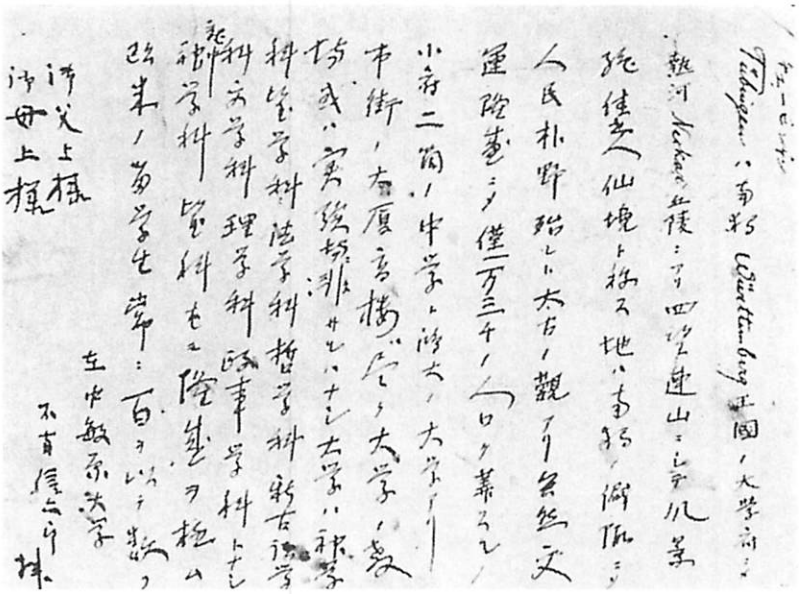
岩瀬郡立病院沿革記　　内務大臣　正三位勲一等男爵後藤新平篆額

海内之醫院何限。而其能久遠如吾岩瀬郡立病院者幾可。唯其久遠矣。故沿革頗曲折。明治四年六月白河縣知事清岡岱作、請太政官置病院於治下。明年二月移須賀川從交通之便地勢之勝也。是為本院之始。縣又設醫學校附焉。會縣癈隷福島縣。院亦癈。鄉人憾之醵貨支持者數月。安場保和新為縣令。赴任途過須賀川。縣支廳、長吏今村秀榮與院督横川正臣、戸長内藤順耳生産方市原又次郎、道山三次郎、鹽田治右衛門、石井勝右衛門、橋本傳右衛門、柳沼大助、柳沼新兵衛、永田藤藏、永田佐吉。邀令陳情。請復縣立。令兪允。本院復興焉。鄉人大喜。時院尚假舊驛廳。充之。令命新築。鄉人争獻貨起工。明年四月告竣。八年縣令為本部病院。置支院於福島、中村、平、三春、若松、以隷之。如此者六歳。當是時。院長鹽谷退藏在職已久。事績兪擧。　明治天皇東巡。駐蹕須賀川。遣右大臣岩倉具視内閣顧問木戸孝允臨院。有所嘉尚。實九年丙子六月也。鄉民感激焉。明年十二月、醫學校別開講習科。以為縣内醫士進修之所。教課日新。而縣會之議漸變。十四年移醫學校於福島。時卒業者既百數十人。經講習者亦百餘人。明年六月、縣又遂罷院。於是院長三浦省軒與鄉人謀。為共同私立。以繼其業。而經費幾不給。郡長荒賀直哉慨之。詢郡組合會議。從十六年五月以後為郡之公立。本院復興焉。三十年始稱岩瀬郡立病院。後十有四年設支院於長沼。其前後增築本支院者。再今茲丙辰又改築本院。規模益張。一歳診療。以所謂延數算之實六萬四千人。所施療亦不下一萬。嗚呼本院之開創若是其久也。本院之惠澤若是其深也。而扶危持顛。意能致有今日者岩瀬人士之誠也。可謂不負　先皇東巡之春矣。今也改築既成。又將記其沿革而刻石。衆議院議員市原翁即往年之生産方而獨猶矍鑠者。受郡會之囑特來徵予文。乞題額於後藤男。蓋本院醫校之於男及予西人所謂揺籃者也。男已喜而頷之。予其獨可辭邪。乃記其概如此。

大正五年十一月三日　　小此木信六郎撰　　西弍書

第9図　明治21年4月，田中敬助氏（左）とともにドイツ留学前の小此木信六郎。

第11図　明治24年11月3日。チュービンゲン大学卒業。有給助手となった時のドクトル小此木信六郎。



第10図　明治21年留学先チュービンゲンより両親（親代りの実兄利義夫妻）への便り（チュービンゲン市の写真のウラに記されたもの）

三浦謹之助　緒方正清　加藤時次郎　西村豊　沢辺保雄　吉松駒造　大西秀治　後藤新平　宇野朗　匹田復次郎　岡玄郷　北里柴三郎　鈴木愛之助　山根正次　川本恂蔵　瀬川昌耆　石黒宇宙治　入沢達吉　緒方収二郎　柴田耕一　金杉英五郎

第 12 図　明治 23 年ベルリンの第 10 回国際医学会に出席の日本人
（写真は「入澤先生の演説と文章」より）

hereditärer Spätsyphilis」を著しドクトル・メディチーネとなった後も同教授の有給助手として実地および研究を行なった。明治 23 年（1890）8 月ベルリンで開かれた第 10 回国際医学会（1867 年 Paris で第 1 回が開かれ，1877 年の第 5 回より耳科が独立科となった）の第 11 部耳科学の部で，ドクトル小此木信六郎の師 Wagenhäuser 教授の「先天梅毒性内耳炎」の講演があったが，この医学会参加の日本人 23 名の中にドクトル小此木の名はみえない。因に明治 23 年 8 月現在のドイツ在留日本人医学生の主な人々（アンダーライン付きは医学会出席者）は，(1)ベルリン大学：宇野朗・岡玄郷・北里柴三郎・緒方収二郎・瀬川昌耆・岡田国太郎・三浦謹之助・後藤新平・金杉英五郎，(2)ウルブリヒ大学：大西秀治・長与称吉・藤野正太郎，(3)ミュンヘン大学：小池正直・岩佐新，(4)ストラスブルク大学：佐藤恒久・入澤達吉・荒木寅三郎，(5)フライブルグ大学：緒方正清・緒方銈次郎・堀内謙吉，(6)チュビンゲン大学：柴田耕一・小此木信六郎，(7)エナ大学：松井武太郎・笠原親文・平野光太郎，(8)ハイデルベルヒ大学：匹田復次郎，(9)ブレスラウ大学：吉松駒造，(10)オーストリア，ウィーン大学：山根正次，で第 10 回国際医学会に出席した人々は上記のアンダーラインの付いた人の他，鈴木愛之助・加藤時次郎・西村豊・石黒宇宙治・澤辺保雄・川本恂蔵の諸氏であった。余談であるが，後年ドクトル小此木の遺族（大槻氏）の方が，渡欧の

際チュービンゲンのあるレストランで小此木信六郎と金杉英五郎のサインの入ったテーブルをみてこられたとの事である。

なお，小此木信六郎が渡欧に出発した明治21年7月8日は，明治17年ドイツに留学した森林太郎が石黒忠悳に随って帰国途中ロンドンに到着した日で，その2カ月後の9月8日に帰朝した。この小此木信六郎が渡欧した年の明治21年12月に，賀古鶴所と金杉英五郎が同じ船で欧州へ向って日本を離れた。またその半年後の明治22年4月に，堀内謙吉が第三高等学校医学部(現岡山大学医学部）を中退，緒方収二郎，緒方正清，緒方銈次郎とともに渡欧した。これら耳鼻咽喉科の先駆者達が，奇しくも小此木信六郎をはじめとして，賀古・金杉・堀内の4人が，1年の間に耳鼻咽喉科を学ぶ目的でなく各々別の目的（小此木は眼科，賀古は細菌学・衛生学・金杉は内科，堀内は？)をもって旅立ち，そして帰国後，診察の面から耳鼻咽喉科の啓蒙と実践を行ない，今日の耳鼻咽喉科学の礎をきづかれたのである。帰国は，賀古が明治22年10月，明治25年に金杉，明治28年に堀内で，そして4人の中で一番早く渡欧した小此木が8年の留学を終り一番遅い明治29年6月ドクトル小此木となり帰朝した。この年の3月に小此木信六郎に大学入学前，ドイツ語を学んだ岡田和一郎がドイツ留学のため離日した。

明治20年代の当時，日本と欧州との耳科についての認識の程度の差を知るものとして，ベルリン留学中の瀬川昌耆（瀬川小児科病院創立者）からの明治22年1月1日付の石黒忠悳宛の書簡の一部を引用する（註11)。

明治29年6月約8年間の留学を終り帰国，ドクトルの称号を得た小此木信六郎は，帰国早々の7月金杉英五郎によって創められた東京耳鼻咽喉科会に入会，7月21日の同会第53例会で卒論であった「晩発性梅毒ニ因スル内耳炎ニツイテ」の演題で講演を行なった。そして8月，東京市神田区南甲賀町*10番地，故原田豊（註12）氏邸（地図参照，現駿河台電話局付近）で耳科専門医院――小此木耳科医院を開業した。このドクトル小此木の帰朝と開業について，当時の代表的な医事雑誌――東京医事新誌，済生学舎医事新報の誌上に大きく報道された。ついで明治29年10月15日の済生学舎医事新報46号，耳鼻咽喉科雑誌第2巻5号（明治29年10月刊）に，10月よりの済生学舎第21回外科および診断実地演習からドクトル小此木信六郎が耳鼻咽喉科の教授を

註11　瀬川書簡――前略，小生今期は病理解剖，化学実習，小児科，耳科に従事致居候，耳科は小児科には離るべからさる須要の科目にても有之旦本邦には未だ専修致せし人も聞及はざる様に被考候間小児科と共に専修致す所存にて当大学教授ルーツェ氏並に講師ヤコブソン氏に就きて研究致居候――中略――前東京大学教師シエルツ氏は耳科は諸科中にて進歩尤も後くれ治療の効現はれす又施すの方法も未だ備はらすとて慢性症抔は大抵不治の様に言ひ居られ小生も左様に信し居り候処当府諸教授の言を聞き又自ら書を繙き見るに中々左様にては無之斯くも疾くより発達致居候乎と驚くはかりに御座候……後略。

註12　原田豊：茨城県出身，明治9年東京大学医学部卒業，内科専攻，明治12年東京大学助教授，明治19年2月待医となり明治27年東京で歿。

＊南甲賀町（17番地）は明治5年より10年まで緒方洪庵の次男惟準が適々斉塾を開いたところでもある。

依託され講議がはじめられたことが報じられている。この明治 29 年 10 月からの講義が済生学舎での小此木信六郎による耳鼻咽喉科の講義のはじめであり，後年の日本医学校の耳鼻咽喉科の講義へと引継がれる。明治 29 年 9 月末の第 20 回外科および診断演習科の内容と講師は下記のようである（特に耳鼻咽喉科関係のみ記す（註 13））。これまでの講義のうち耳鼻咽喉科に属する内容は，臨床講義で行なわれほとんど外科の講師（主に桂秀馬講師が多い）によるもので，その他は内科の領域で急・慢性鼻加答児，衂血，喉頭結核，喉頭梅毒などであった。その他，学舎の機関誌――済生学舎医事新報に，賀古鶴所：耳病診察の一斑(明 26)，鼻喘息(明 27)，鼻息肉(明 31)，金杉英五郎：有臭削瘦性鼻炎（明 28）などが記載された程度であった。しかし，明治 29 年 10 月からは上記の外科実地演習に，ドクトル小此木による耳鼻咽喉科講義が加えられ，小此木耳科医院の盛業とともに，これが耳鼻咽喉科普及の布石となった。この画期的な出来事について，明治 30 年 3 月 18 日この第 21 回外科実地演習，第 22 回顕微鏡実地演習の卒業式で舎長長谷川泰(東京耳鼻咽喉科会賛助会員）はその演説の中で下記のように述べ，この出来事の意義を強調している(註 14)。以後数回の卒業式においても同様に強調している。余談であるが，この明治 29 年 10 月，光田健輔（1876～1964，森鷗外の紹介で賀古鶴所の書生となり，病理学専攻，救ライのため一生

註 13　明治 29 年：済生学舎外科診断演習

(1)外科的実地演習，講師田代義徳

1．血管結紮（総頸動脈，舌動脈等 17 項目）
2．神経手術（顔面神経等 9 項目）
3．切除術（左右上顎骨切除等 9 項目）
4．切断術（上・下肢の切断法）
5．関節離断術（上・下肢の主な関節につき 13 項目）
6．成形手術（造鼻術等 4 項目）
7．頸部手術（喉頭摘出術，気管切開術等 4 項目）
8．胸部手術（乳房切断等 2 項目）
9．腹部手術（胃切開等 8 項目）
10．泌尿生殖器手術（4 項目）
11．切腱術（2 項目）

(2)器械学

1．刀の種類及把刀法
2．切開のための補助器
3．結紮術に要する器械
4．切除，切断術に要する器械
5．血性及無血性手術に要する器械（例套管針パクレン焼灼器等）
6．その他特別手術器械の説明：扁桃腺切断法，欧式管カテーテル，耳鏡，鼻鏡の種類，喉頭鏡等。

(3)診断学実地演習：講師高田耕安，一般の他に喉頭鏡検法。
(4)電気用法実地演習：講師山田良叔。
(5)眼底検査実地演習：講師野辺省三。
(6)繃帯式実地演習：講師石川清忠。
(7)産科模型演習：講師千葉稔次郎。

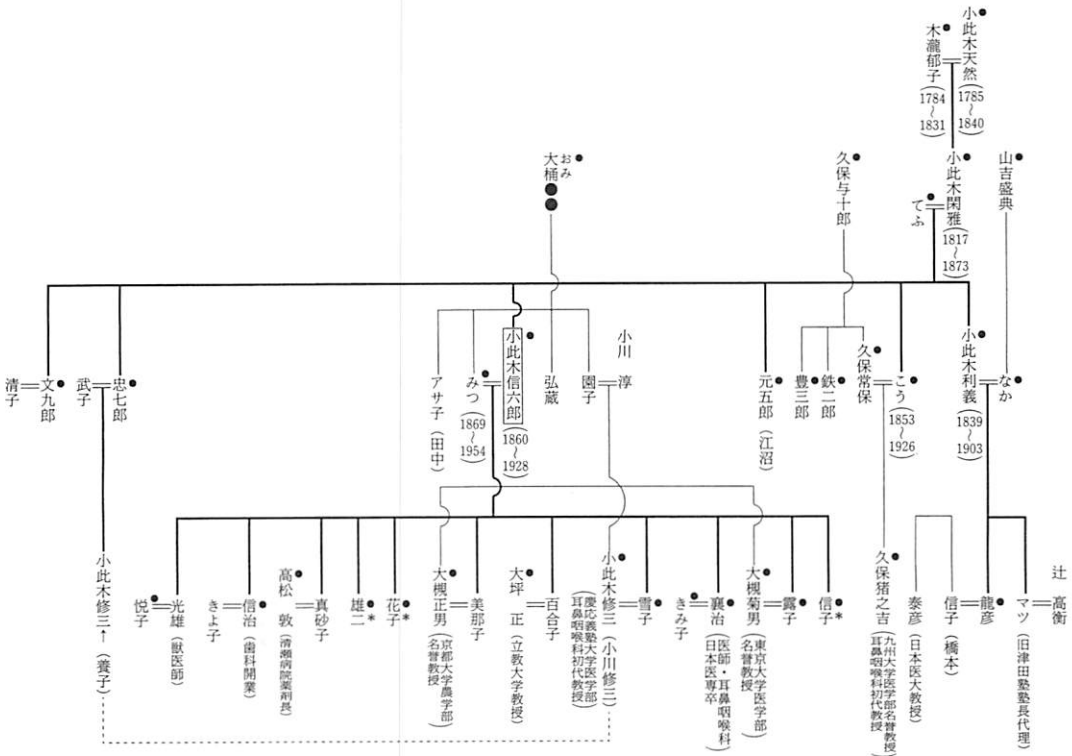
註 14　長谷川泰：明治 30 年 3 月 18 日　講演

前略――前回の演習よりは今日御列席の小此木先生の耳科学の演習を受けられるることの如き益あり。此耳鼻咽頭科の演習を為すは日本唯一の大学（註：東京大学）にもなし，只た僅に東京の某病院（註：東京病院？）に一個所あるのみにして到底全国中何処へ行くとも之を為すこと能はざる所にして而も小此木先生は斯学に在りては彼国に於て已に有名なる先生にして其業績の如き彼国の雑誌中に記載せられたるもの多く中々他の専門家と称する人々の及ばざる所なれば，如此先生に就て如此新専門学の演習を受けたる諸君は実に絶大の利益を得たる人と謂ふ憚からざるなり――後略。

をささげた）が学舎を卒業，半年遅れて野口英世（1876～1928）が学舎で学んでいた。

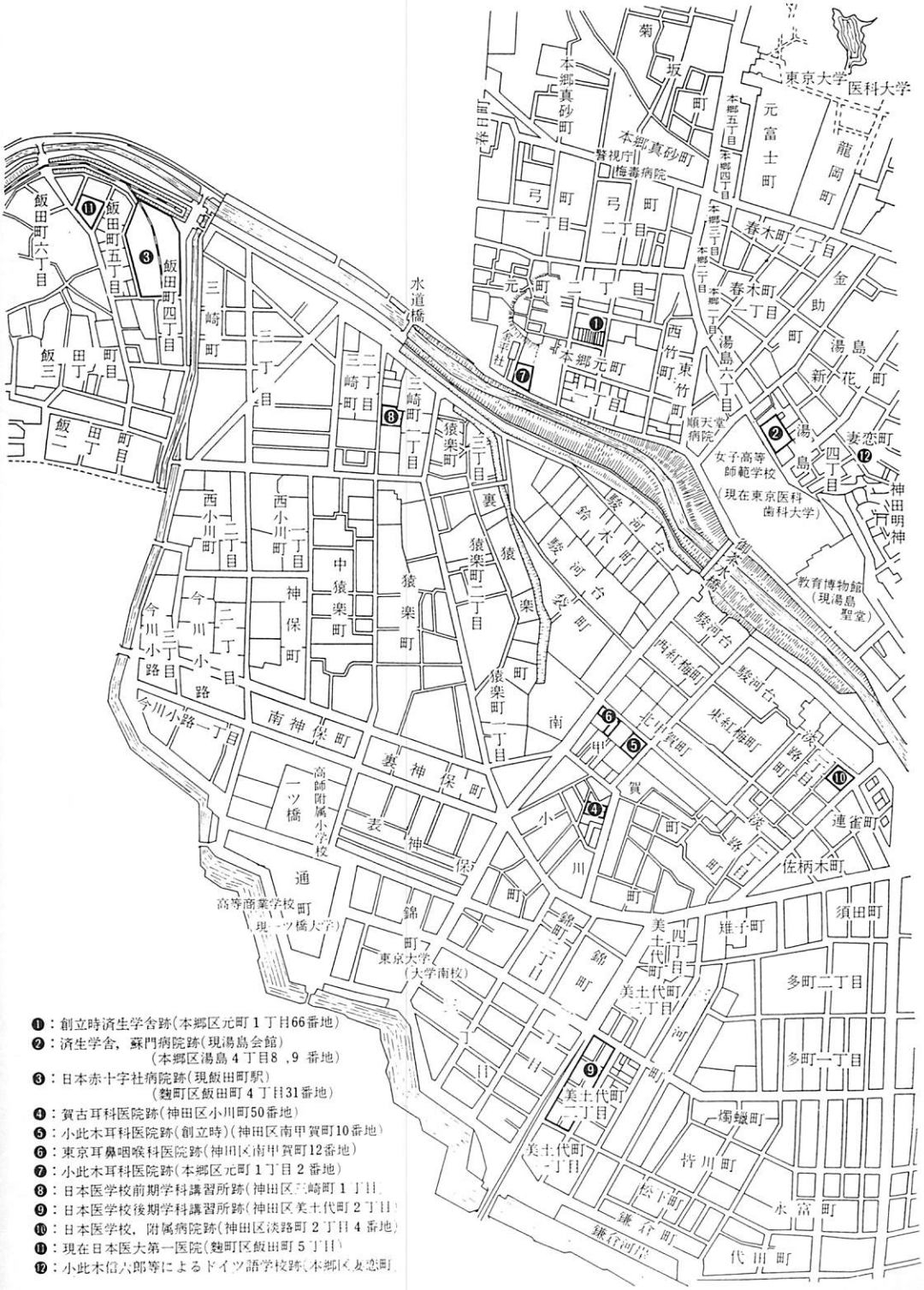
ここで明治29年頃までの耳鼻咽喉科の歩みについて触れてみる。詳細については，久保，岡田，田中各氏の文献を参照されたい。

わが国の耳鼻咽喉科の第一歩は，すでに衆知の如く，明治23年（1890）2月12日，飯田町4丁目31番地(現飯田町駅)博愛社病院――明治19年11月17日創立，明治24年5月渋谷に移転，現日本赤十字社医療センターでの賀古鶴所（1855～1931）による耳科・咽喉科の外来診療にはじまる。賀古鶴所は次いで明治23年4月第1回日本医学会(現在の日本医学会とは別，日本連合医学会が現在の日本医学会の始）で「耳病ノ説」の講演を行ない，明治25年耳科新書を刊行，同年神田小川町に賀古耳科院を開業した。一方賀古鶴所と同じ船で渡欧した金杉英五郎(1865～1942)は，ドイツ，エルラゲン大学でドクトルの称号を得た後，明治25年3月に帰国した。同年9月より東京慈恵医院医学校で耳鼻咽喉科学の講義を開始，12月に日本橋久松町に東京耳鼻咽喉科医院を開院，明治26年2月東京耳鼻咽喉科会を結成，11月に耳鼻咽喉科研究所をつくり講習会を開催，耳鼻咽喉科雑誌を創刊(11月7日)，明治28年12月に医院を日本橋久松町より神田南甲賀町12番地（現主婦の友ストア付近）に移転した。堀内謙吉（1870～1931）は明治28年に帰国し大阪の緒方病院で耳鼻咽喉科の診療をはじめた。明治32年には大阪で堀内耳鼻咽喉科病院を開業した。



●故人
＊幼少時に他界
小此木忠七郎：島崎藤村の親友，藤村の仙台行きは忠七郎によるもの．

付図



❶：創立時済生学舎跡(本郷区元町1丁目66番地)
❷：済生学舎，蘇門病院跡(現湯島会館)
(本郷区湯島4丁目8，9番地)
❸：日本赤十字社病院跡(現飯田町駅)
(麹町区飯田町4丁目31番地)
❹：賀古耳科医院跡(神田区小川町50番地)
❺：小此木耳科医院跡(創立時)(神田区南甲賀町10番地)
❻：東京耳鼻咽喉科医院跡(神田区南甲賀町12番地)
❼：小此木耳科医院跡(本郷区元町1丁目2番地)
❽：日本医学校前期学科講習所跡(神田区三崎町1丁目)
❾：日本医学校後期学科講習所跡(神田区美土代町2丁目)
❿：日本医学校，附属病院跡(神田区淡路町2丁目4番地)
⓫：現在日本医大第一医院(麹町区飯田町5丁目)
⓬：小此木信六郎等によるドイツ語学校跡(本郷区妻恋町)

地図　明治10年代～30年代の本郷・神田地区の市街略図

III. 耳科専門医としてのドクトル小此木

明治29年6月帰国したドクトル小此木は，8月から駿河台の小此木耳科医院で診療を行ない，10月から創立20年目の済生学舎に迎えられ耳鼻咽喉科の講義を開始した。同年10月18日に上野精養軒で発起人長谷川泰，参会者70余名のもとで，ドクトル小此木の歓迎会が開かれた。ついで10月24日，国家医学会第9次総会が日本橋坂本町東京医会本部会場で開かれ，その席でドクトル小此木は「軽微ナル内耳刺戟ニ起因スル一種ノ重聴及全聾」を発表した。翌10月25日上野精養軒で開かれた第4回東京耳鼻咽喉科総会においてドクトル小此木は副会頭に選ばれた。会頭は金杉英五郎であった。同10月25日済生学舎一番教室で開かれた済生学舎校友会の第1席で「独逸国医学生の状態」の講演〔済生医事新報47号（明治29年11月15日）掲載〕を行ない，ついで11月19日の校友会例会で「耳科学研究の必要」の演説を行なった。しかし明治29年11月13日に医科大学で開かれた東京医学会第69例会で講演予定であったが，病気のため欠席した。12月4日，済生学舎の片山芳林・保利真直・小此木信六郎の三講師歓迎慰労会が江東中村楼で開かれ，その席上ドクトル小此木は次のような演説を行なった（註15）。

12月6日には，東京顕微鏡院が神田小川町一番地に移転，開院式と第四回総会を行なったが，

第13図　明治20年留学前27歳の誕生日記念写真
写真のうらに，御姉上様，信六郎と筆による署名がある。姉こうは，久保猪之吉の実母である。

註 15　明治 29 年 12 月 4 日，片山・保利・小此木三講師の歓迎会での小此木の演説

私は今日別に何も述べるを要さぬ，即ち只有り難ふ御座いましたと御礼を申せは宜しい。併しながら世界には又我日本などより見ると実に憐むべき国民がある。即ち彼のバルカン半島などにては医師と云う名義の下に立ちて種々他の仕事をする仮之は政治屋壮士などをするか実技を以て世を渡り人を救ふ可き人の為すべきこととは考えぬ。是等の人は恰も彼の化学に四つの原素（炭・水・酸・窒）ある如く人にも亦「ヤマシ」「スリ」「ゴマノハイ」「ドロボウ」の四個の要素ありて其他に一分の医師気あれば医師を為し，商人気あれば商人を為し，官吏気あれば官吏を為し，代言気あれば代言を為す等の如きものであると考える。諸君は決して如此ことをせず能く営業と職業との別を考えて世に処し人を救はれん事を希望す。何となれば諸君の出てられたる学校は即ち 19 世紀と 20 世紀間の医師の継続者にして諸君の地位たる実に後来世の歴史に上るべき所の有望のものであるからして何卒彼のバルカン半島の如き憐れの有様に倣はすして十分なる業績を挙げられん事を望むものであります。

その席でドクトル小此木は金杉英五郎とともに講演を行なった（演題は不詳）。12 月 19 日に開かれた順天堂医事研究の慰労会，忘年会に佐藤進・坪井次郎・呉秀三・入沢達吉・金杉英五郎・山田良叔らとともに出席した。12 月 28 日，済生学舎実地演習科の卒業式に出席，次のような講演を行なった（註 16）。

註 16　明治 29 年 12 月 28 日，第 21 回実地演習卒業式

私は今日先づ諸君に向て深く謝せざるを得す。即ち諸君は私の如き不肖なる者の教授を御受けになりても毫も厭はすして終始能く勉励せられ試験の結果も非常に良くして甲点乙点尤も多く丙丁は少くして戊の如きは僅かに一人に過ぎず，此良成績を得られたるは実に諸君の勉強の結果に外ならすと信じます。其他に今一の謝すべきとは私か私の畢生操を変へすして従事せんと欲したる此耳科に従事せられる諸君を多く得たると此学をまた日本の大学にも入れさるに先たちて此学舎に於て演習を開始せられたること之なり，故に私は嬉しさの余に畢生の力を以て諸君に教授せんとするも如何にせん。時日短かきか故に十分なること能はす，故に只たイデイとインテンストを諸君に向て注ぎ込み夫れより爾後は諸君の脳力に従て愈く深く研究し得る様に其道を付けたるのみ何卒諸君一面には此道に拠りて針路を定め十分に勉強研究して以て斯学の発達を計り一面には患者をして少しも早く其患苦を忘れしめ以て医たる本分を尽されん事を望むものであります。

明治 30 年に入り 3 月 12 日にドクトル小此木信六郎による耳科学講習会が開かれた。当時すでに明治 26 年から金杉英五郎による耳鼻咽喉科研究所講習会が行なわれており，明治 28 年に金杉の東京耳鼻咽喉科医院は日本橋より神田区南甲賀町 12 番地に移っており，耳科学講習会を開いた小此木耳科医院は，東京耳鼻咽喉科医院とは隣同志となった。耳科学講習会の規定は註 17 の如くで，南甲賀町での講習会は明治 30 年末まで続けられた。3 月 28 日ドクトル小此木は済生学舎の外科実地演習卒業式に山田良叔・竹崎季薫とともに出席，舎長長谷川泰につづいて次のような講演を行なった（註 18）。

3 月にはじめられた耳科学講習会は，5 月 28 日に第 1 回修了式と祝宴を行なった。講習生は註 19 の如くで，修了式でドクトル小此木と講習生秋山正作と木内剛が代表して謝辞を述べた。ついで第二回耳科学講習会と第一回鼻咽喉科講習会が 6 月からはじまり 8 月 30 日に修了し，同日修了